

第42回 高橋記念賞

高橋記念賞は、故高橋愛次氏の功労を記念し、扶桑軽合金株式会社（現 株式会社アーレスティ）より寄贈された基金により、軽金属鋳物、ダイカスト、展伸材、二次合金および再生地金等の溶解・鋳造に関連する工業技術の進歩発展に功労のあった技能者に贈る。



江口 秀夫 君
(独立行政法人造幣局)

江口秀夫君は、1981年4月に大蔵省造幣局（現 独立行政法人造幣局）に入局以来、38年間一貫してアルミニウム地金の溶解・鋳造および貴金属精製作業に従事し、現在に至っている。1997年および2011年の溶解炉等の主要設備の更新に際しては、製造現場作業員の主力として鋳型の変更や作業内容の変更を手掛け、市中から回収した1円アルミニウム貨幣の鋳つぶし（再生地金等の溶解鋳造）の安定的なアルミニウム塊鋳造作業を実現するなどの生産性向上に寄与した。こうした取り組みにより、電子マネーの普及等で増加した回収1円アルミニウム貨幣の鋳つぶしに対応することができたとともに、1円アルミニウム貨幣製造における再生地金利用率向上に貢献した。これらの活躍が評価され、2001年に技能長、2014年に作業長に就任するとともに、2017年には造幣局理事長表彰、大阪府優秀技能者表彰（なにわの名工）を受賞している。さらに、2018年からは総括作業長（職場長）として、永年の溶解鋳造作業等で培われた豊富な技能と経験を活かし、作業の安全確保および若手作業員に対する鋳造技能の伝承にも尽力している。



片岡 秀文 君
(株式会社UACJ)

片岡秀文君は、1987年にスカイアルミニウム株式会社（現 株式会社UACJ）に入社以来、32年間一貫してアルミニウムの圧延用スラブ製造に係る原料、溶解、鋳造の業務に従事し、現在に至っている。2006年に鋳造職場作業組・作業長に就任し、現場のリーダーとして、特に生産量にこだわり、設備故障や作業ミス等の芽を部下と協力して事前に摘み取り、スラブ増産に大きく寄与した。2012年に鋳造職場・職場長に就任してからは、アスペクト比が特異なスラブの製造条件確立に向けて、鋳型設計段階から関わり、リスクアセスメントやその対策まで職場長として先頭に立ち職場一丸となって解決することで、歩留まりが良く、安全に製造することが可能となり、さらに職場全体の能力向上にも大きく貢献した。現在は、原料職場・職場長として、原料手配、入荷から各溶解炉に装入する原料の準備に関する業務を統括している。また、職場長として職場の安全を最優先する文化・風土作りにも貢献している。さらに長年培ってきた経験を活かして後進の育成にも尽力している。



柴田 和宏 君
(株式会社神戸製鋼所)

柴田和宏君は、1986年に株式会社神戸製鋼所に入社以来30年以上、マグネシウム合金およびアルミニウム合金の砂型鋳造業務に従事し、安全活動や生産性向上を始めとして、新合金の製品開発や高難度な鋳造品の立上げと海外展開などに多大な成果を上げてきた。特に2000年にはWE43マグネシウム合金製レース用鋳物の製造開発に携わり、不活性ガスにて型内置換することにより溶湯の流動性を高め、さらに溶湯の酸化を抑え介在物を削減する製造法の開発に携わった。また2010年にはRolls-Royce（RR）社向け航空機エンジン用インターミディエイトケース鋳造品の開発、量産に大きく貢献した。本製品は世界でも数社しか製造できない高難度な鋳造品であり、RR社の認定を取得して量産納入し、株式会社神戸製鋼所の技術力の高さが世界に認められた証となった。更に大型マグネシウム製インターミディエイトケース鋳造品増産のために、2014年に大型マグネシウム製品専用鋳造工場を新規設立し、当工場の設備導入計画や立ち上げにも尽力した。現在は、製造現場を統括する係長として、これまでの豊かな経験と情熱をもって生産性の向上や品質改善、後進の指導・育成、安全活動の推進に努めている。



土屋 正一 君
(日軽松尾株式会社)

土屋正一君は、1980年4月に松尾工業株式会社（現 日軽松尾株式会社）に入社以来、39年間一貫してアルミニウム合金の重力金型鋳造およびダイカストに関する業務に従事してきた。特に、特殊ダイカストと呼ばれる層流ダイカスト法やスクイズダイカスト法、無孔性ダイカスト法、真空ダイカスト法などの量産技術確立に携わり、これら特殊ダイカスト法の特長を生かした熱処理が可能で高強度・高耐圧性を有するダイカスト品などの量産化を達成した。また、同君は難鋳造アルミニウム合金である過共晶Si系アルミニウム合金のダイカストにも取り組み、耐摩耗性が求められる輸送部品への適用・商品化にも成功した。さらに、従来は重力金型鋳造が用いられてきたプレーキキャリアの製造に世界で初めて高速ダイカスト法を適用し、チーム一丸でその量産化を達成した。このように、アルミニウム鋳物・ダイカスト技術の発展に大いに貢献し、現在もその豊富な経験と高い技能を活かし、後進の指導育成にも尽力している。